

星図・星座図の系譜(1)

世界地図に添えられた天文図

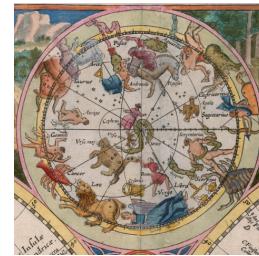
How We Mapped the Universe

私たちは周りの世界を把握するために地図を作成します。そして、その延長として星図を作成します。どちらに対しても、できるだけ多くの情報を正確に集め、アップデートを繰り返してきました。世界地図に添えられた副図（周囲の余白に描かれた図）の情報をもとに、日本に伝えられた世界地図の系譜をたどることができます。

世界地図の製作者の中には、同時に星図を制作しているケースも多く見かけられます。例えば美しい世界地図を残したプランシウス（Petrus Plancius, 1552-1622）は天文学者でした。ブラウ親子（Willem Blaeu, 1571-1638 と Joan Blaeu, 1596-1673）が世界地図に添えた星座図は書写されて司馬江漢に影響を与えたしました。

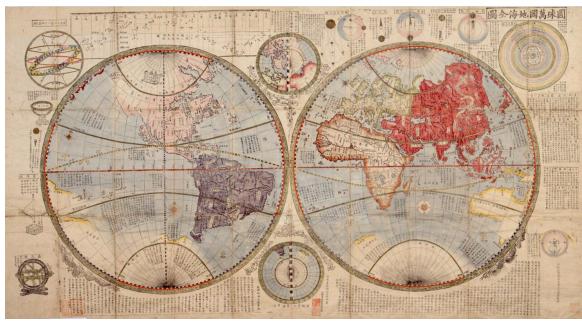
● P. Plancius 『世界のあらゆる場所』(1594年)

1594年にPlanciusが描いた世界地図には、星座図が副図として添えられています。大航海時代がはじまり、南極点付近の星の情報をもたらされ、新たな星座が次々と考え出された時期です。世界地図づくりはオランダが先行していて、日本にもその情報がもたらされていました。



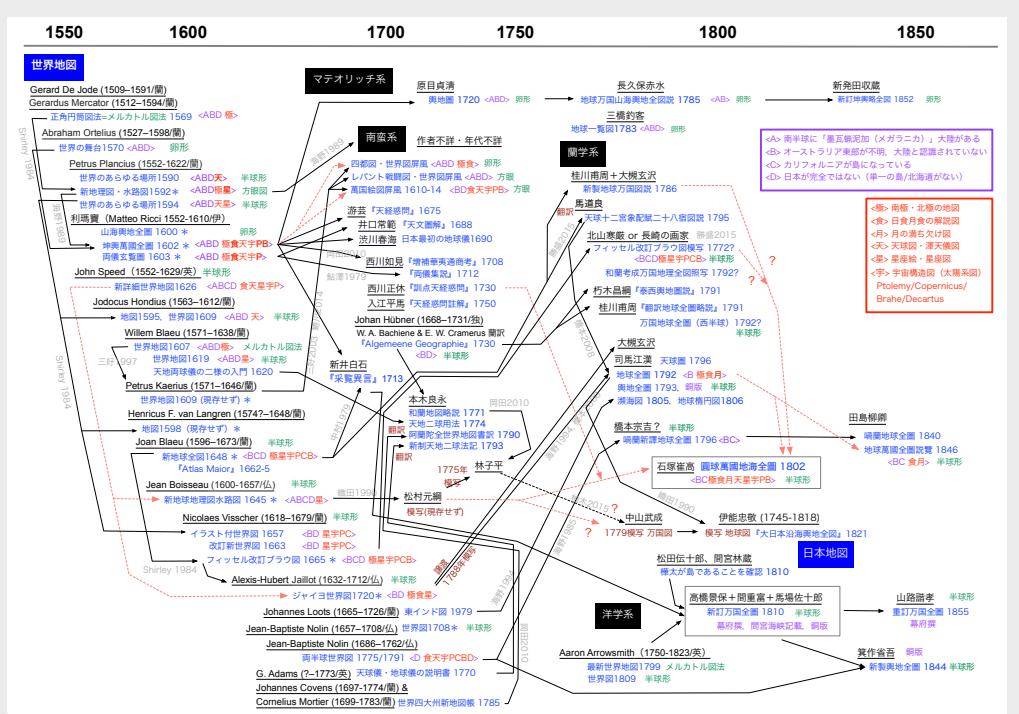
● 石塚崔高作『圓球萬國地海全圖』(1802年)

薩摩藩では積極的に学問が進められました。右は、江戸時代最大のサイズの世界地図です。木版手彩で縦120cm x 横215cm。周囲に描かれている副図は次のものです：九重天の図（右上）、宇宙構造（太陽系）図（右下）、気象の説明（右）、地球、月、太陽の位置図（上列右）、北極中心の世界地図（上列中央）と南極中心の世界地図（下列中央）、黄道十二宮二十四節（上列左）、黄道と赤道の関係図（左上）、地平儀、象限儀、簡天儀（左）。図版は神戸市立博物館がウェブ公開しているもの。



● 日本に伝えられた世界地図の系譜

世界地図に描かれた特徴や、掲載された副図の情報から、誰がどの地図を参考に新たな地図を作成したかが推測できます。



詳しくはこちる。真貝寿明
大阪工業大学紀要68 (2023) 1

星図・星座図の系譜(2)

星図・星座図の発展

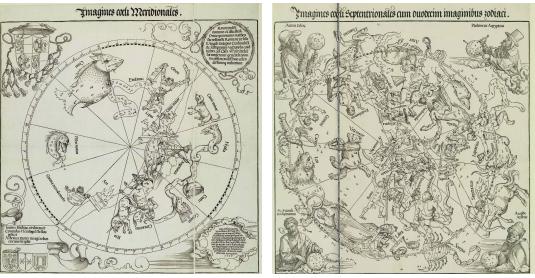
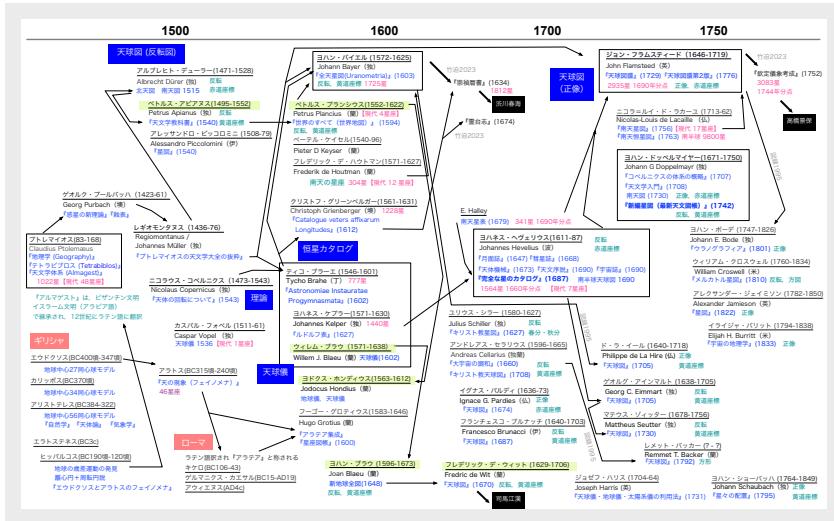
How We Mapped the Universe

夜空の星を記録する試みは2000年前のプロトマイオスの頃から記録があります。現在、国際天文学連合(IAU)が定めた88星座が世界共通で使われていますが、そのうちの48星座がプロトマイオスが定めたものです。天体望遠鏡が発明されたのは、ガリレオによる1609年のことですが、それ以前につくられた星図が宣教師によって中国に伝えられます。宣教師は、中国人の描く星座を西洋星図に載せた図を作成し、それが日本にもたらされます。

● 欧州での星図・星座図の系譜

欧州で星図を初めて作成したのは、ルネサンス期の画家・版画家として名高いデューラー (Albrecht Dürer, 1471-1528) でした。この星図の図柄が、その後の星座図の方向性を決定づけました。一番の特徴は、(神の視点で) すべての星座が天から地球を見下ろすように、星座に登場する神々の顔が後ろ向きに描かれていることです。下の系譜図で《反転》としたものがこの系統です。すべてが《正像星図》に置き換わられるのは18世紀になってからでした。

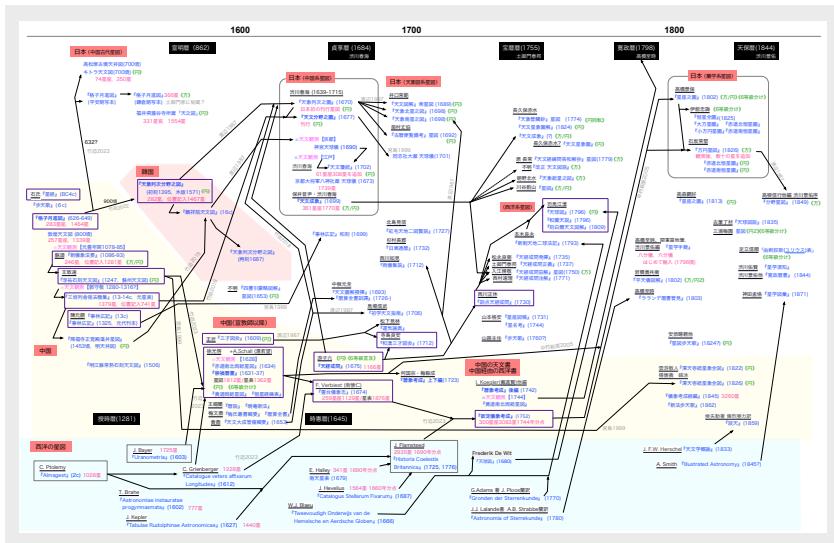
(印刷博物館図録よりスキャン)



● 日本・中国・韓国での星座図の系譜

江戸時代前半は、中国からの文献が唯一の情報として使われました。江戸時代の後半には、西洋の情報が中国経由と蘭書経由の2つのルートからもたらされます。西洋の星座図にはじめて触れた司馬江漢は、中国星座との違いにカルチャーショックを受けています。そして、苦労して反転星図を描きました。

(画像は文化遺産オンラインより)



司馬江漢による天球図 (1796年)。反転星図であり、南天図・北天図とも中心は黄極。

和蘭天球ノ圖ハ彼國ノ法ニ
禽獸人物異形ヲ以テ星ノ名トス
各其名目アルト雖
彼國ノ辞ニシテ啻十二宮ノ名ノミヲ訳セリ

西洋の星座が「禽獸人物異形」でなされていること、黄道の星を十二宮と名付けていることと日本での二十八宿が対応することが、新事実として解説されている。そして、中国星座名に西洋の星座絵を重ねて描いている。

(大阪工業大学 真貝寿明)



詳しくはこちら。
真貝寿明、
大阪工業大学紀要69 (2024) 1